

予算倍増、検診率50%

韓国のがん対策

韓国のがん対策が今、注目されている。この数年でがん検診の受診率を急上昇させることに成功し、今年には50%に達した。政府が無料検診を拡大させる一方で、民間のキャンペーンも活発だ。米国では長年のがん対策と高い乳がん検診受診率で、死亡率の低下という成果を上げる。日本では政府が掲げる目標「がん検診受診率50%」の到達への道が見えてこない。

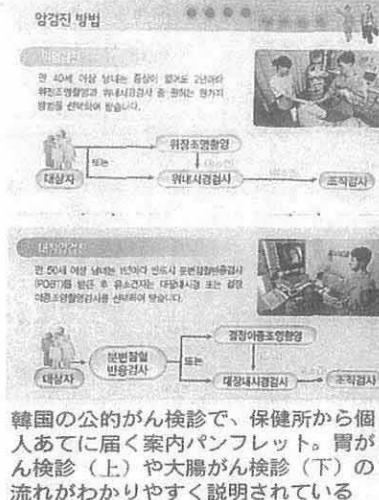
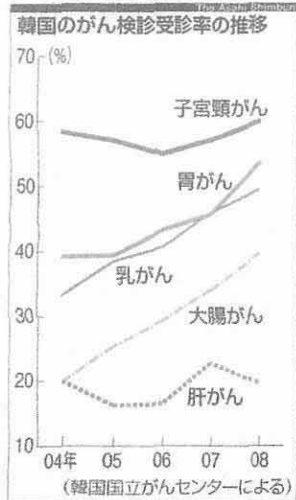
(編集委員・浅井文和、岡崎明子)



がん予防検診センターで大腸の内視鏡検査をする医師ら(ソウル郊外)の韓国国立がんセンター、浅井文和

無料対象者が半数に拡大

ソウル市郊外にある韓国国立がんセンターはがんの専門治療と研究で知られる。07年6月、最新鋭設備を備えたがん予防検診センターを開設した。乳房X線撮影(マンモグラフィ)や胃の内視鏡検査など、さまざまな検診を一度に受けることができる。禁煙指導など予防にも力を入れている。標準的な検診費用は男性105万円(約7万円)、女性の対象者とそれに対する受診



率に比べてほぼ倍増した。乳がん検診者でもある看護師の金秀・延世大看護学部助教授は「数年前はがん検診への国民の関心は低かった。今は関心が高まって、検診の無料化が進み、がん患者への医療費補助も拡充して治療を受けやすくなった」という。

検診受診率の向上は早期発見につながる。盧東栄・ソウル大医学部教授(外科)によると、韓国の乳がん患者のうち0期という早期がんの割合は96年に4%だったが、07年には15%程度まで増えた。盧教授が役員を務める韓国乳癌健康財団は01年ごろから乳がん検診を訴えるピンクリボン運動を積極的に進めている。

検診受診率の向上は早期発見につながる。盧東栄・ソウル大医学部教授(外科)によると、韓国の乳がん患者のうち0期という早期がんの割合は96年に4%だったが、07年には15%程度まで増えた。盧教授が役員を務める韓国乳癌健康財団は01年ごろから乳がん検診を訴えるピンクリボン運動を積極的に進めている。

日本は20〜30%

一方、日本では昨年、政府が「がん対策推進基本計画」を決め、がん検診受診率を5年以内に50%以上にする目標を掲げる。しかし、受診率は乳がん検診が20〜30%など、胃・肺・大腸・乳・子宮がんの検診で20〜30%程度だ(07年、国民生活基礎調査)。

特に、乳がんは早期発見、治療による効果が大きく、力点が置かれた。90年には「乳がん・子宮がん予防治療法」が成立し、低所得者向けの公的医療保険「メディケイド」の加入者も無料で検診が受けられるようになった。米国対

「がん検診受診率50%」の到達への道が見えてこない。韓国のがん検診で、保健所から個人あてに届く案内パンフレット。胃がん検診(上)や大腸がん検診(下)の流れがわかりやすく説明されている。

がん協会は、40歳以上の女性は毎年、マンモグラフィ検診を受けるよう勧めている。受診率は87年の39%から00年は70%に上昇。その結果、死亡率は90年から04年にかけて毎年2〜2.2%下がった。

だが白人に比べ、黒人やヒスパニック系の人の受診率は低く、死亡率の低下も鈍い。全米に約4600万人いる無保険者への対策が大きな課題で、自治体やNGOなどが取り組みを重ねている。

しかし昨年、「00年以降、検診受診率が4%下がった」との論文が発表された。理由は明確でないが、特に50〜64歳の年齢層と高所得者層で受診しない人が増え、専門家は死亡率の上昇につながらないか懸念している。

国あげて乳がん対策

米国

米国では71年、当時のニクソン大統領が「がんとの戦い」を宣言し、がん対策法が成立して以来、国を挙げてがんによる死亡率を下げることに取り組んでいる。

01年にプログラムを始めて以来、1万6千人以上が無料検診を受け、65人に乳がんが見つかった。がんが見つかった場合は、州が無料で治療を提供する場合もある。

がん低圧を目指して

～がん検診で早期発見・早期治療を～



東京大学医学部付属病院放射線科准教授
緩和ケア診療部長
中川恵一先生

がん検診は重要だ！

1960年、東京生まれ。85年東京大学医学部放射線科卒業。同年東京大学医学部放射線科助教入局。89年スイスPaul Shemar Instituteに専攻研究員として留学。93年東京大学医学部放射線科助教高助手。96年専任講師。2002年度教授。03年から現職。

がんで命を落とさないために 今すぐできることが「がん検診」

数米では減少しているがんの発生率が、日本では増えないままその原因の「がん低圧」の重要性の低さ。早期発見・早期治療の力とならざるが、がん検診の重要性について、東京大学医学部付属病院放射線科准教授・緩和ケア診療部長の中川恵一先生に、日本のがん検診率と早期発見の重要性について話を聞きました。

**がんは「体の老化」の一種
誰もがリスクを抱えている**

塩見 日本人の2人に1人が生涯にがんになり、3人に1人ががんによって亡くなると思われています。にもかかわらず、がんに対する知識が少なく、漠然とした不安を抱えている人が多いのか、やはり「がん」とは何なのか、わかりやすく教えてください。

中川 がんを一言で言う「体の老化の一種です。私たちの体は毎日、細胞分裂を繰り返していますが、その過程でDNAに傷がたまると、突然変異で「不変細胞」ができます。これががん細胞で、健康な人でも毎日約500個もできています。言われていますが、通常は免疫細胞が退治してくれます。しかし、退治しきれず残った細胞も生き残ると、1個が2個、2個が4個と倍々増えていくのです。

が4個と倍々増えていくのです。やがてがんになっていくのです。塩見 つまり、誰でもがんになるリスクはあります。

中川 はい、日本では「死」や「死と直結するイメージ」のあるがんの話題がタブー視されています。がんが知識が広まるために、具体的な「損」に気づく人が増え、治療も進みます。例えば、がん検診は「がんの治療」手術というイメージが強いのですが、多くのがんは放っておいても同じくらい分る段階で発見できるのです。乳がんの場合、乳房を摘出することがありますが、乳房を摘出してもがんは残ります。また、欧米に比べて大きく遅れているのが、子宮頸がんです。性交渉によるウイルス感染が主な原因の子宮頸がんはワクチンで予防できる感染を防ぐ、残りの半分もがん検診で早期発見すればほとんど治ります。100万円以上でマタニティが使用されており、米国や欧州などでは無料で予防接種を受けられます。日本でも、ようやく来年の秋に導入される予定です。治療も、欧米では日本と違い放射線が中心です。塩見 がんの知識が浸透しない原因のついでに、医学用語の難しさがあるのでしょうか。

例えば「化学療法」は抗がん剤を使った治療法のことですが、耳にすると「科学」に通ずる放射線治療と混同する人も多いため、また「緩和ケア」ともわかりにくいという声をよく聞きます。簡単に言えば「苦しみを減らすだけという時期からやわらび患者とその家族の生活の質を確保するための」と「治療」は治すこと。両者のバランスが大切で、初めから心のケアを含めた緩和ケアが必要なのですが、末期が患者を対象とした「終末期医療」と誤解されていることも多々あります。

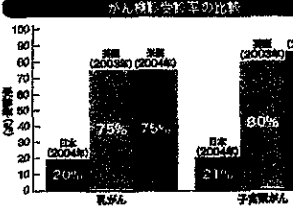
塩見 昨年、厚生労働省が「がん対策基本法」を施行するなど、国をあげての取り組みが始まっています。

中川 「がん対策推進基本計画」では、10年以内の目標として「がん患者やその家族の苦痛を軽減して生活の質を上げる」「75歳未満のがん死を20%減らす」「2つを柱としています。そして、死亡率を下げるとの具体的な数字目標として、5年以内のがん検診受診率を50%以上にすることを掲げました。

塩見 がん検診は重要だ！というものが、もっと理解されなければなりません。

塩見 がんは早期であればほぼ完治できます。早期発見の切り札が「がん検診」です。ただ、1つ以下のがんは見つけないのが難しく、早期がんといえるのは2つくらいまで、1つのがんが2つに成長するには約1年半しかかかりません。早期がんを発見できるチャンスは、とても短いのです。しかし、逆に言えば1〜2年ごとのがん検診を受ければ、がんを早期で発見でき、ほぼ完治することが期待できます。

塩見 しかし、厚生労働省の調査によると、平成18年度のがん検診受診率は部位別では、以下のように、10%台、20%台にとどまっています。内臓別の調査では、がん検診を受けない理由の上位に「健康で異常がない」「検診の手続きや方法、費用がわからない」「面倒だ」ということが挙げられます。早期がんは自覚症状がないので、知らず知らずのうちにがんが進行してしまっているケースが多々あります。



平成19年度がん検診率の比較(乳がん・大腸がん) 厚生労働省がん検診率調査結果より

「がんに関する普及啓発懇談会」発足

がんの予防、検診の重要性、がん治療、放射線治療、緩和ケアなどを広く知ってもらうために、厚生労働省がん対策推進基本計画の「がんに関する普及啓発懇談会」がスタートしました。座長の中川恵一先生をはじめ、07年にがんを克服された山田裕子さん、がん療法のパイオニアであるアフラックのがん検診担当の永江美保子さん、塩見知明さんなどのメンバーが、がんの普及啓発活動を展開してまいります。



10月に開催された「がんに関する普及啓発懇談会」の様子



中川恵一先生(左)、塩見知明さん

塩見 がんの知識が浸透しない原因のついでに、医学用語の難しさがあるのでしょうか。

中川 たしかにその通りですね。

『がんのひみつ』プレゼント

2人に1人が、がんになる世界一の「がん大国ニッポン」。がんを知るためのバイブル、中川恵一先生著『がんのひみつ』(朝日出版社)を抽選で100名様にプレゼント

がんのひみつ

2人に1人が、がんになる世界一の「がん大国ニッポン」。がんを知るためのバイブル、中川恵一先生著『がんのひみつ』(朝日出版社)を抽選で100名様にプレゼント

申し込み(送料着払い)：本広告掲載の掲載誌を2冊購入のうえ、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を明記し、下記のいずれかの方法でお申し込みください。

(はがき) 〒104-8665 東京都中央区本町3-303号 朝日新聞東京本社広告局「がんのひみつ」係
(FAX) 03-5872-6634
(インターネット) <http://www.asahi.com/e-post/>
締め切り/12月28日(金)必着
※当選者の発表は、商品の発送をもって完了させていただきます。おたがいた個人情報は、商品の発送のための使用いたします。